

最早宣教師・修道士（女）はいなかったと思われる。

それでは、漂着時には何処から通訳が出来る人が来たかという問題になるが、先日、宇目町重岡に足をのびし確認した処、重岡に残存するキリシタン墓（大分で最大のもの）に眠る死者の年代が一六二〇年となっており、もし、この人物等が来たとすれば問題は解決する。

それに重岡から蒲江までの道程の問題であるが、北浦町を流れる天ヶ内川・下塚川の岸伝いの道を行けば、蒲江まではさほどの難所もなく行くことが出来る。

蒲江に行く途中、峠から沖を見れば、そこは太平洋。

異国の船が漂着するにはふさわしい景色が続く。

当時、蒲江は太田一吉の領土でもあり、その後も蒲江町の海岸に中国船が漂着した記録がある。

以上は、私の私見で根拠は薄いかもしれないが、村井氏等の説に結びつくものがあるかもしれないと思い、あえて愚考を述べた次第である。

#### 表紙解説

### 唐子童子（からごどうじ）

大正から昭和の初期にかけて別府市を中心に活躍した、石造彫刻家岩井大眠氏（いわいたいみん）の力作。別府市流川の繁華街その一角に立って変わりゆく街、人情、ずいぶんと自分勝手になったものだと苦笑いをしている。

童髪、頭上や左右に毛を残して剃る、江戸時代おもに女兒の髪風で前髪を残すときは、前髪童子といった。

写真並びに説明

軸丸 勇